リレー随筆

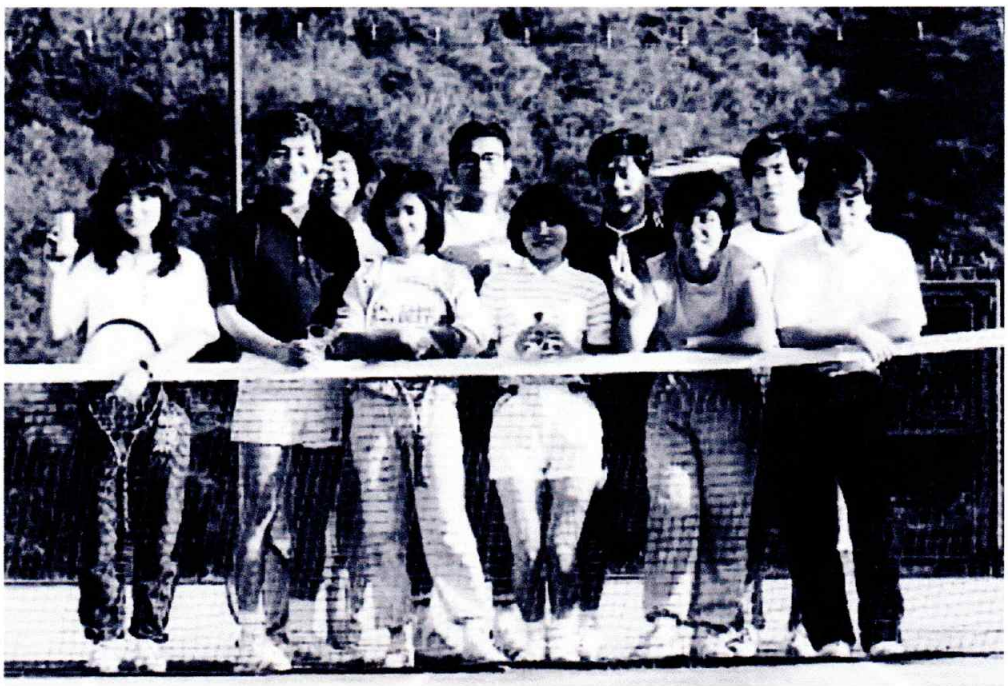
ああ～優勝トロフィー（ありがとう湧田さん）

宮良クリニック
宮良　球一郎

「かつてのテニス仲間である。」という湧田さん（わくさん内科院長）の、リレー随筆最後のフレーズを読んでしまってからは、過日湧田さんから電話があり、「次は宮良おまえだから頼むよ」と言われたときには、頭の中に書いてみたい1つのテーマが浮かんでいた。しかしテ・ニ・スの字が目に入った時、そのテーマは吹き飛んでいった。今は乳がんの世界に、どっぷり浸かってしまっている私だが、かってテニスに青春をかけていた？時代も会ったことを、思い出してしまったのだ。

我が家には、タンスの上に2つのトロフィーがぽつんと置かれてある。少しホコリをかぶっているが、40数年の人生で得た、かけがえのない杯なのである。1つは学生時代、医学部長杯争奪テニス大会で湧田さんと組んで参加し、湧田さんを、さんざん走らせて手にした優勝したトロフィーで、もう1つは研修医時代、同僚とコンビを組み、最後は足を引きずりながら、もぎ取った病院長杯のトロフィーである。少年野球からはじまり、バスケット、卓球、ハンドボール、そして空手と、いろいろなスポーツを楽しんできたが、優勝の二文字とは全く縁の無い世界にいた。しかし、テニスだけは、助け合い（助けられ？）の精神で、美酒を味わうことができた。娘達も、純粋で無垢な幼子のときは、優勝トロフィーを目にして、私をテニスの天才と信じて疑わなかった。今は...。

学生時代当時、世はまさしくテニスブームであった。あちこちに、にわかテニス同好会が、それこそ雨後のタケノコのようにでき、壁打ちの音が医学部の校舎にも響いていた。しかも男女が一緒に楽しくテニスをしている。実に羨ましい光景に、ミーハー（死語？）なくせに、彼女のいなかった寄生虫仲間（注：寄生虫学教室に出入りしていた学生の意）は、ごく当然の、全く不純な目的で、テニスラケットを購入し、



寄生虫学＆微生物学教室そして寄生虫仲間（テニス合宿で）
※前列右から2番目のVサインをしているのが著者。

一応テニスルックで身を固め、流行の最先端にいる自分達に酔い、既に一流テニスプレーヤーの仲間入りの夢をみていた。しかし、いざテニスを始めてみると、やはり皆格好だけの素人集団、見ると、するとでは大違いで、フェアウエーが広いのに、ラフにしか飛ばないゴルフと同じで、どうしても相手のコートにボールが入らないのである。これではテニスに投資した金が不良債権化するどころか、女の子に振り向きもされない。危機感を感じた我々は、同期でテニスがうまいと評判の湧田さんに白羽の矢をたてた。どうして湧田さんなのか。当時の湧田さんは（もちろん今も）、温厚な顔で、いつもニコニコ。勉強する姿勢も真面目そのもので、同期の尊敬を集めていた。人生経験は豊富で、年令は私より遥か上、そしてなによりもクラスに2人しかいない沖縄出身だったのである。私の頼みなら、きっと優しく寄生虫達（注参考）をトッププレーヤーにするに違いないと。本心を隠し、湧田さんにお願いした。やはり二つ返事であった。「よっしゃー、これで目的が達成出来る」と皆小躍りした。

だが、しかし大きな誤算があった。テニスをするときの湧田さんは、鬼と化すことを、知らなかったのである。あの温厚の顔からは想像ができないほどの、ガチガチの体育会系だったのだ。チャラチャラした同好会が、一夜にしてテニス部に変身した。ボールは打たせてもらえず、毎日毎日素振り。落日を眺めながら、「どうしてこんな遅くまで素振りをしているんだろう」と自問したことも。しかも、なんと湧田さんも変わってしまったのだ。あれほど真面目な存在だったのに、退屈な講義だと（その時、私と湧田さんはいつも前から2列目の中央にでんと座っていた。）、いきなり「おい宮良、テニスにいくぞ。」とすっと立ち上がり、講師の前を堂々と歩き、教室をでていった。私も、はじめは面食らったが、教えてもらう弱い立場なので、講師の前を頭を下げながら出て行った。しかし何度も繰り返される状況（それだけつまらない講義が多かった？）に、ついには、いつでもテニスが出来るよう準備し、湧田さんに声をかけられると、さっと立ち上がり、一応は少し前屈みになりながら、湧田さんの後についていった。ほんの20～30分の練習で、私は容赦なく振り回され、次の講義で湧田さんは真面目に講義を受けているが、前から2列目の中央の席で、私はすっかり疲れて寝息をたてていた。
(当然少しだけ脚色が入っていることをお断りしておきます。)

しばらくすると、ミーハーな不純な気持ちが消えて行った。そんな気持ちが持てないほど、コートを走らされたのが本音だが。

ルールを覚え、試合が出来るようになり、しかも勝つ味を覚えたら、私自身がテニスに溺れて行ってしまった。もうここまできたら引き下がれない、出入りしていた寄生虫学教室はもちろん、隣の教室の微生物学教室から、生化学教室の教授をはじめ、たくさんの教室員を巻き込んで、言葉巧みに、テニスの魅力を語り、軽井沢でテニス合宿をはった。テニス大会も勝手に催した。ウィンブルドン伊勢原大会だの、東関東エリアテニス大会など、やたらと大会名を付けてはテニスをした（当然優勝とは全然縁がなかった）。熱しやすく、冷めやすい性格な私は、その時は燃えていた。ウィークデーの夕方や日曜日は、テニスコートを探し求め、それでも飽き足らず、ついにはテニスクラブ平日会員となり、木曜日は休講日と勝手に決めて、同じく休講日と叫ぶ輩と終日テニスに明け暮れた。バイト代も皆テニスへ。なんて青春なんだろう！？。

これだけ徹底すれば、多少は強くなってくる。自信も芽生えてきた自分の力を試すため、何度か湧田さんに挑戦した。だが百戦錬磨、本物の体育会系には赤子をひねるごとくあしらわれた。

学部長杯争奪テニス大会は年1回開かれた。テニスをするものにとっては、あこがれの大会。大学は6年しかないからチャンスはそうない。形式はダブルスのみ、湧田さんコンビは当然常勝。トロフィーも自宅天井裏にしまうほどあるに違いない。私は無冠。なんとしても欲しい。答え

は簡単である。ついにプライドを捨てた。「湧田さん沖縄人同士でコンビを組んで下さい」。優しい湧田さんは断る術が無い。こうして私の強い希望の入った沖縄コンビが誕生した。

湧田さんはニコニコと戦い、私は必死の形相で。そして夢にまで見た優勝。人生初めてのトロフィーをこうして私は手に入れた。祝杯をあげたと思うが、その後のことは、覚えていない。本当にトロフィーが欲しかったのだろう。

その後医師となって、しばらく、テニスに明け暮れ、二つ目の優勝カップを手に入れたが。研修医で日常業務に忙殺されていたこともあったが、あの時の燃えるような熱情は無くなってしまっていた。

平成の幕開けの日、ゴルフ好きの仲間に引っ張られてゴルフレンジにたった。そして私のテニス人生の幕が静かに閉じたのである。

★リレー状況

－平成14年以前掲載省略－

32. 川平稔先生（コザクリニック）Vol. 39 No. 1
33. 長嶺文雄先生（湘南病院）Vol. 39 No. 4
34. 松岡政紀先生（北部病院）Vol. 39 No. 7
35. 小橋川悟先生（読谷村診療所）Vol. 39 No. 10
36. 鳥谷裕先生（ライフケアクリニック読谷）Vol. 39 No. 12
37. 玉井修先生（曙クリニック）Vol. 40 No. 3
38. 田川辰也先生（琉球大学大学院医学研究科 薬物作用制御学分野）Vol. 40 No. 4
39. 藤本奈央子先生（医療法人清心会 徳山クリニック内科）Vol. 40 No. 6
40. 戸澤雅彦先生（安立医院）Vol. 40 No. 9
41. 大湾勤子先生（独立行政法人 国立病院機構 沖縄病院）Vol. 40 No. 11
42. 宮城茂先生（独立行政法人 国立病院機構 沖縄病院）Vol. 41 No. 2
43. 祝嶺千明先生（しゅくみね内科）Vol. 41 No. 3
44. 宮城裕二先生（みさと耳鼻科）Vol. 41 No. 4
45. 親川富憲先生（医療法人富岳会 おやかわクリニック）Vol. 41 No. 6
45. 折田均先生（ハートライフ病院）Vol. 41 No. 7
46. 湧田森明先生（わくさん内科）Vol. 41 No.9